

22年前の英仏旅行

R3.3.12

林 興一郎

コロナ全盛の今、旅行が出来ないので、過去の旅を思い出して、懐かしんでいます。未だ、現役であった22年前の、平成11年7月、夏休みを利用して、イギリスとフランスを旅行しました。前年、技術士の資格試験を受けるため、8カ月間、休日返上で勉強して、何とか合格した反動で、今年の夏休みは遊ぼうと決めたのです。イギリス、フランス両方を欲張ったのは、ユーロトンネルを抜ける国際列車ユーロスターに乗りたかったからです。手配した列車の切符が出発前に間に合わず、入手したのは、福岡に前泊した翌朝、福岡空港でのこと。ロンドン発、パリ行きユーロスターの切符とイギリス国内のチェスターへ往復する列車の指定券を渡されると、手作りの旅への期待が高まりました。成田経由でパリ・ドゴール空港に着き、ロンドン行きの飛行機に乗り換えると子供連れの客がたくさん乗り込んで、いかにもローカル線といった雰囲気です。パリでは晴れていたのに、ロンドンに着くと雨。空港からタクシーに乗ると運転手がロンドンの天気を「four seasons a day」と言って笑わせました。このホテルで良いのかと言いたげな顔の運転手にOKと言って入ったホテルは、遠来の客が泊まるには、ちょっと安宿で、夏休みの若者が溢れていました。スタンダードクラスのホテルを指定したのが、この時期としては失敗でした。部屋に入ると、狭いのは仕方ないにしても、シャワーの水が出ないので、洗面器に水を汲んでかぶるような始末。もっと悪いのは、部屋の近くをエレベータが通っていて、夜中じゅう、音がうるさくて眠れなかったことです。翌朝、強硬に抗議して部屋を替えてもらいました。その日は午前、観光バスでロンドン見物。午後は大英博物館へ行き、エジプトのミイラなどを見物。夕方、疲れて公園に入ると椅子があちこちに置いてあり、黙って座ると爺さんがやって来て一脚1ポンド(200円)と言います。ちょっと驚きですが払うしかありません。

翌朝の朝食はパンと紅茶だけの粗食。ホテルの不満を言っても始まらない、美術館へ行こうと、地下鉄でトラファルガー広場に出ると目前に立派なナショナルギャラリーの建物があり、無料で名画をいくらでも見る事が出来ました。次は、コートールド美術館、ここは印象派の名画が揃っています。テムズ河のほとりにあると分かっているのに、歩き回って探すのに時間を食いました。もう一つ行こうとタクシーを拾ってテート美術館へ。ここはイギリスの画家、ターナーの絵が有名です。こうして美術館を3つ見て一日が終わりました。

翌日は古都チェスターを見物。チェスターに向かう列車から見る風景は、山というものが無く、ゆったりした起伏の丘が続き、羊や牛が群れていました。チェスター駅に11時に着いて、人々について行くとやがて、古都に入る門が見えます。中はお伽話のような雰囲気。白壁に黒い木枠の家が連なり、2階にも通路があり、それがつながっていて、1階も2階も人がそぞろ歩いています。道の真ん中でバイオリンを弾いている男がいます。パブに入って昼

食にしました。ビールは **bitter** か **lager** かと聞かれ、違いが分からないが **bitter** にすると、黒く細かい泡が立ち、正解でした。古代ローマ時代の競技場跡を見て、城壁に登り、通路をそぞろ歩くとアンティークの店を発見、その中で、目当ての **blue willow** の皿を見つけました。絵柄は、文字通り、柳が風になびいている風景を描いた染付です。イギリスでは使い古されたものが大事にされるので、この皿も誰かが使った物が売りに出されていて、絵の一部は擦り切れて白くなっていました。72 ポンドというのを 65 ポンドに値切って買いました。今でも家で愛用しています。

5時に駅に戻ると驚きました。帰りのロンドン行きの列車はストップしていると言います。駅員に聞くと、あれに乗ってマンチェスターへ行くと停車中の列車を指差します。マンチェスターはロンドンとは逆方向で、意味が分からず躊躇していると、早く乗れと顔を真っ赤にして怒鳴ります。とにかく乗り込んで満員の客に何が起こったのか聞くと鳥が送電線を短絡させたとか、よくあることだという顔付です。マンチェスターからは別の線路があり、ロンドンへの特急があると言います。親切にも、その人がマンチェスター駅で特急列車まで連れて行ってくれました。もし今夜、ロンドンへ戻れなかったら明日のパリ行き列車に乗れなかったところですよ。

翌朝、**Waterloo** 駅でパリ行きユーロスターに乗りました。車内に大きい荷物を入れるスペースが少なく、長い列がもたもたしている内に、折角のユーロスターを記念撮影する時間がなくなりました。発車後、イギリス国内はゆっくり走り、1時間もするとこれからトンネルですとの案内がありました。座席の間の通路は狭く、車内販売員が **last car** から売りますと言って去って行きました。トンネルを出るとスピードが上がり、窓外には沃野が広がり、イギリスとは違って、地平線が見えます。パリ北駅に着くとイギリスよりもずっと暑く感じました。出迎えの車でフランツール・パリ・リヨン・ホテルに着くとホテルの部屋は広く、ゆったりしていて、家内は安心しました。しかし失望は夜、待っていました。冷房がないのです。フロントに電話して冷房のスイッチのあり場所を聞くと「**I am sorry, there is no air conditioner, nothing to do**」と言います。あまり正直なので文句を言う気がしません。

その日、午後は未だ十分時間があったので、先ずシャンゼリゼ通りに出て、パリの雰囲気を楽しむ、その後、オルセー美術館まで歩きました。そこは、ミレーやルノワールやセザンヌ、ゴッホ、ゴーギャンなど印象派、後期印象派の絵の宝庫です。見物中の日本人夫妻が慌ただしくやって来て、「ミレーの落穂ひろいはありましたか、主人がどうしても探しているの」と聞かれました。確かにありました。こうして一生懸命、見て帰ろうとする人に同情しました。

翌日は、ルーブル美術館三昧。4時間歩き回って、モナ・リザ、カナの婚礼、いかさま女、ナポレオンの戴冠式、ミロのビーナス像、サモトラケのニケの彫刻等々。家内は塩野七生の「ローマ人の物語」を読んだ直後で、カエサル、ネロ、オクタ비아ヌス等のローマ皇帝の像を見つけて喜んでいました。歩きくたびれて館内のカフェで遅い昼食にしました。

翌日は滞在最後の日。先ずオランジュリー美術館へ行きました。ここはモネ専用と言っても良く、「睡蓮」の秀作が一杯並んでいます。地下室の壁にぐるりと一周して「睡蓮」が描かれています。圧倒されました。

次の予定はベルサイユ宮殿。予定した路線 RER が不通なので、モンパルナス駅から SNC F に乗り、20分で着きました。宮殿の入場券を買うのに1時間待たされ、やっと入ると、王妃の間、皇帝の間、鏡の間などさっと回って30分、更に広大な庭園に入るのにまた入場券を買わねばなりません。ばかばかしくなり、庭園は諦めました。

パリ市内に戻り、夕食後、ホテルに帰る時のことでした。軽装で財布をズボンの尻のポケットに入れ、ボタンを掛けていました。ポケットが膨らんで財布があることが丸見えです。油断していました。地下鉄に乗って、ドア近くに立っていると三人組が乗って来て、私のそばに立ち、コインを落として私のズボンの裾を探ります。何をするのだとしゃがんで払いのけていると尻のポケットのボタンが外される気配、やられたと思うと財布がありません。夢中で目の前の男の後ろから両腕でしがみつき「冗談ではないぞ」と日本語で大声で怒鳴りました。男は逃げようと右に左に腰を振ります。別の二人はホームに降りて待っています。ドアが閉まろうとする瞬間、男は財布を投げだして降りました。財布には現金で500フラン札(約1万円相当)が3枚入っていましたが、2枚抜き取られていました。カードは無事でした。争っている間、車内の誰一人として関心を示さず、フランス人は冷たいと感じました。色々、親切にしてくれたイギリス人に親しみを覚えました。

翌日は出発の日。午前の時間があり、ピカソ美術館へ行きました。大作は見当たりませんが、多くの絵や彫刻がありました。時間が余ったので、ブローニュの森を歩き回りました。昨夜の一件を生々しく思い出しながら。

ハプニング続きの手作りの旅でした。